

拝啓 檀信徒の皆様におかれましては益々御清祥の事とお喜び申し上げます。日頃、眞観寺にお心をお寄せいただき有難うございます。

私こと

平成二十四年九月十日付けで眞観寺の住職となりました。仁治三年（一二四二年）八月三日に没した眞観寺中興一世りゅうけん灌憲阿闍梨から数えて四十五代目の住職となります。今後とも一意専心、眞観寺の清掃維持、護持発展に心を尽くしますので、檀信徒の皆様にはよろしくお願い申し上げます。

今年も早いもので年の瀬となり、新しい年を迎えます。

瑞光満ちる平成二十五年元旦、恒例の元朝護摩を観音堂で厳修いたします。護摩祈願を御希望の方は、左記の「小見眞観寺元朝護摩」をご一読の上、同封のはがきに住所・氏名・年齢・願意を書いてご返送ください。

お申し込みはファックス（〇四八―五五六―二二〇〇）でも受け付けます。

複数体の申し込みの方は、眞観寺に申込書があります。折り返しお送りしますので、電話〇四八―五五六―二六七八までご連絡下さい。遠方の方には護摩札を郵送致します。送料は無料です。ご遠慮なくお申し込み下さい。

合掌

平成二十四年十二月

眞観寺住職 中村 重継

檀 信 徒 各 位

小見眞観寺元朝護摩

・ 日時 平成二十五年 元旦 午前十時より

・ 場所 眞観寺観音堂 正観音菩薩御宝前

護摩（じま）とは

護摩は正しくは「護摩修行」と言います。真言密教の修行の一つで、護摩火中に仏を招来し、御仏の真体を観じます。

護摩によって煩惱を焼き浄め、大厄を消除し、家内安全、身体健全、商売繁盛等、開運を祈願します。

護摩の願意について

護摩の願意は自由です。眞観寺の護摩は祈願と滅罪の護摩です。左の代表的なお願ひがあります。

- ・ 災厄やくよけ消除
- ・ 交通安全
- ・ 身体健全
- ・ 商売繁盛
- ・ 傷病平癒
- ・ 大願成就
- ・ 合格成就
- ・ 就職成就
- ・ 工事安全
- ・ 労災絶滅
- ・ 従業員安全
- ・ 事業繁栄
- ・ 方除
- ・ 火難除
- ・ 御礼
- ・ 家内安全
- ・ 身上安全
- ・ 延命長寿
- ・ 当病平癒
- ・ 心願成就
- ・ 開運満足
- ・ 学業成就
- ・ 工場安全
- ・ 勝利祈願
- ・ 商売繁盛

（お願ひがかなったときに）

護摩札は一体に付き一願意です。護摩の準備の都合がありますので、なるべく十二月二十八日迄に早めに申し込み下さい。

護摩祈願料は三千円です。祈願料は申込時だけでなく、元旦に持参されても大丈夫です。

尚、遠方の方は護摩札の郵送（送料無料）と併せて銀行振り込みをご活用下さい。

男女大厄	大 厄			小 厄			厄 年 早 見 表
	後厄	本厄	前厄	後厄	本厄	前厄	
昭和28年生まれ	昭和46年生	昭和47年生	昭和48年生	昭和63年生	平成元年生	平成二年生	男性
	昭和55年生	昭和56年生	昭和57年生	平成6年生	平成7年生	平成8年生	女性

観音堂三百周年記念念珠

昨年お知らせしましたが、眞観寺の観音堂は平成二十四年で三〇〇周年となりました。

何度も書いていきますので、御存知の方も多いと思いますが、眞観寺の観音堂は、正徳二年（一七二二年）に小針田島家当主の母親の寄進により完成しました。その時の住職は十九世秀盛です。

昨年は記念事業として観音堂内の畳表を替えました。今年は三〇〇周年記念念珠を作ります。念珠の材料となった木は眞観寺仁王門解体修理の際に取り替えた一層部分の樗柱を使っています。

念珠の加工は滋賀県近江八幡市の木地師「半兵衛」の技術を伝える㈱カワサキが担当しました。加工後は約三〇〇年という時間の経過を感じさせない艶があります。カラーでお見せできないのが残念ですが、非常に良い仕上がりとなっています。元朝護摩の際に御覧下さい。

ケヤキの玉の大きさと房の色（男性用は茶と金茶、女性用は金茶と紫）で6種類あります。お好みの品をお選び下さい。念珠は、元朝護摩の時にお願いします。念珠一匝、数珠袋付きで三千元です。

他にも眞観寺羅漢松（観音堂前の黒松）から作った夫婦の念珠もあります。いずれの念珠も「小見観音」の刻印入りです。

木製の念珠の良さは何と言っても積善の回向の徳を最期に持って行けることに尽きます。この機会にどうぞ。



左から男性用22玉、男女兼用27玉、女性用34玉です。

児玉義隆師の伝授

十一月十九日午後三時より、梵字悉曇（梵字を書くこと）が専門の種智院大学児玉義隆副学長が眞観寺客殿にて真言宗智山派埼玉青年会の会員を対象に梵字悉曇の伝授を行いました。当日は二十五名の青年僧が眞観寺客殿に集まり、実際に刷毛筆を使いながら熱心に児玉先生の悉曇伝授を受けました。

元来、「寺」とは世俗とやや離れた山の中にありました。インドで当時の最新学問である仏教を学んだ僧侶が、中国に旅して「寺」に滞留し、近隣の僧侶を集めて学問を伝授する場所でした。まさにこの日は「慈雲山眞観寺」が寺本来の機能を発揮できた日と言えます。

児玉先生は「この伝授は二時間では短すぎる。来年はもっと長い時間伝授したい」という言葉を残して、熊谷駅から京都に帰りました。

児玉義隆師の奉納

かねてから眞観寺の本堂天井阿弥陀陀羅尼真言を絶賛して止まない児玉先生に、私は七月に眞観寺本堂の天井梵字を写真で撮影して送りました。先生からはメールで「私なりにこの百三十字を書いてみるから」という返信がありました。

それから三ヶ月経った十一月十七日の夜十時頃、児玉先生から電話があつて、「いや、百三十枚一気に六時間で書き上げたよ。下手だけど見てくださいか」と、興奮した様子で、電話を戴きました。

上の写真は百三十枚の色紙と児玉先生です。眞観寺本堂天井梵字は二十五世弘濟師が書き



刷毛書きに取り組む僧侶達
前列右から二番目が住職

ました。天井梵字と色紙の書についてを児玉先生は、

「刷毛書きは如何に幅の広い刷毛を使いこなせるかに尽きる。弘濟師こうさいの梵字は江戸初期に梵字悉曇をまとめた澄ちようぜん禅師の字をよく学んでいる。それに今まで見た中で一番筆幅が広い。この幅が一番のポイントだ。澄禅師でさえ、弘濟師こうさいより一回り幅の狭い筆を使っている。私も時間が無かったので、この書を自分のものに出来ず二回り狭い筆で書いてしまった。だから私のこの色紙の書は下手なんです。」

と、解説していました。いやはや、スポーツでも何でもそうですが、当代一流の人が伝説の人を解説する言葉は積年の努力に裏打ちされた凄みがあります。

私も児玉先生が絶賛する天井梵字を大事にし、天井梵字に近づけるよう、自身も刷毛書きに邁進したいと思います。

しばらく白黒になります。

前向きな話題の次は、少々残念なお話です。

平成十二年から続くこの「眞観寺のお知らせ」は写真のあるページをカラー印刷で作成していました。しかし、今回から全て白黒刷りとなります。

これは、今まで使っていた平成七年製カラーレーザープリンタが壊れた為です。秋葉原電気街の中古屋で平成十二年に「一万円！」の破格で売られていたのを見つけ、メンテナンスをしつつ使い続けていました。当初六万枚まで印刷できるということでしたが、五万二千枚で力尽き、メーカーの修理期限も八年前に切れている現在、これ以上修理するべきがなく、泣く泣くあき



12年間お疲れ様！ Canon LBP-2030

らめました。眞観寺のお知らせを三百部以上印刷するのに一昼夜かかるといふ「亀のような遅いプリンタ」でしたが、プリンタ導入費用を含めてカラー印刷を一枚三円程度でこなしていたのが自慢でした。

現在の印刷は某所で不要になったリース上がりの白黒プリンタで印刷しています。

心掛けてプリンタの中古を探していれば、いずれ眞観寺のお便りを再びカラー印刷にできる日も来ると思います。その日まで安くて品質がそれなりの「良い」プリンタを探し続けたいと思います。

「中興」とは

重継は眞観寺の「中興四十五世」住職に当たります。中興とはどういう意味でしょうか。

辞書的な意味では一度衰えていたり途絶えた物を復興させるという事です。王朝や寺院を再興した人が「中興の祖」という美称で呼ばれます。「美称」ですので、「美人」を使うときと同様、一人称で使ってはいけません。例えば、「私は美人」って言ったら間違えです。

眞観寺の「中興の祖」は一ヶにあるとおりに、仁治三年に遷化した瀧憲阿闍梨です。「中興の祖」は中興一世に当たります。その中興一世から数えて四十五代目が重継にあたります。そこで、正式には「中興四十五世」と呼称します。

平安末期（千二百年頃）の瀧憲以前の記録は不明です。しかし、僧侶の感覚として、最低百年程度は途絶えていないと「中興」とは言いません。眞観寺の歴史は多くの書に記述があるように紀元八百年の坂之上田村麻呂將軍の頃なのかもしれません。

激しい浮き沈みのある寺の場合は、「現在の和尚は二十世であるが、中興十五世、再中興十世、再々中興八世である」と表記します。

ちなみに「中興四十五世です」と言うとき「中興で四十五世ですか！」と驚かれます。

般若心経を詠む会を開催しています

九月から十二月まで、観音様の縁日である毎月十八日に「般若心経を詠む会」を開催しています。

今年は新しい試みとして法話会を行いました。

般若心経を詠む会では誰でもお唱え出来るよう、ゆっくり丁寧にお唱えすることを心掛け、皆で般若心経をご唱和しています。腹式呼吸で合唱する事は、呼吸の活性化と気持ちの和らぎに繋がります。まずは客殿で練習し、最後に観音堂にて般若心経をお唱えして、練習の成果を観音様に報告しています。

日時 十二月十八日（火曜日） 十時～十一時半

場所 真観寺客殿

~~~~~ 来年の干支について ~~~~~

来年は巳歳です。昔の人は方位に十二支を当てはめて表しました。左の図のように巳は五時の方角です。

十二支を八方位に当てはめたので、巳年の守り本尊は辰年と同じ「普賢菩薩」です。

普賢菩薩の慈悲行については昨年書きました。今年は「菩薩」について説明します。

「菩薩」は元々、梵語「ボーディ・サットバ」の音訳「菩提薩埵」を略したものです。「ボーディ」は「覚り」、「サットバ」は「生きる世界」の事です。「覚り」とは彼岸、「生きる世界」は此岸（この世）

と解釈出来ます。

菩薩とは「覚りの世界とこの世の世界を往来して、多くの衆生を救う修行をする人」の事です。



巳年の守り本尊  
「普賢菩薩」 観音堂前の八体佛

